様式２

小中一貫教育実践校グループ

旭丘中学校・旭丘小学校・小竹小学校

中学校区の特色

・３校とも、丁寧な指導、近隣大学との連携による芸術分野の指導に特長がある。小中一貫教育校設立に向け、小小、小中間の連携を強化している。

目指す１５歳の姿

・未来を切り拓く力を獲得するための基礎的・基本的な学びを身に付け、課題解決に主体的に取り組むとともに、自分の考えを豊かに表現できる生徒
・心身共に健康であり、自身の在り方を他者との関係性において深く内省し、よりよいかかわりを求めることで、自他ともに大切にできる生徒
・学校生活における一体感、地域や関係各校との絆を大切に、新たなよき伝統を築こうとする進取の姿勢を育む生徒

１　目指す１５歳の姿の具現化に向けた取組……【重点取組1】

数年後に練馬区２校目の小中一貫教育校が誕生する。新しい９年制の学校は　現在の各校における教育活動の延長線上にあるという考え方に拠り、３校の全教諭から、「所属校の現状」や「新校の教育に対する思いや考え」について聞き取りを行った。（アンケートによる）結果は以下の通り。

Q　現状を踏まえ、どんな学校にしたいと考えるか？

学習活動に関する構想

旭丘中	旭丘小	小竹小
○基礎・基本の習得 ○個々の成長 ○思考力・判断力・表現力	○考えをもち、表現する ○個に応じた指導 ○基礎・基本の習得	○基礎・基本の習得 ○自分の考えを豊かに表現できる ○きめ細かいサポート

豊かなこころを育む教育活動に関する構想

○思いやりの心を育む ○自他を大切にする ○豊かな感性	○思いやりの気持ちを育む ○自他を大切にする ○笑顔でのびのびと力を発揮できる	○個性を理解し、相手を大切にする ○豊かな感性・情操 ○思いを表現したり人の気持ちを理解したりできる（読書の効用）

特別活動（学校行事や、部活動、地域や関係機関との連携・協力を含む）に関する構想

○新しい伝統となるような行事や地域と連携した活動 ○進んで行事に参加できる ○大学との連携強化	○達成感、一体感をもてる取組 ○新しい伝統となるような行事や地域と連携した活動 ○１～９年が関わる縦割り活動	○行事に一生懸命に取り組む ○異学年で活動に取り組む ○地域との交流がある ○芸術に触れる機会がある

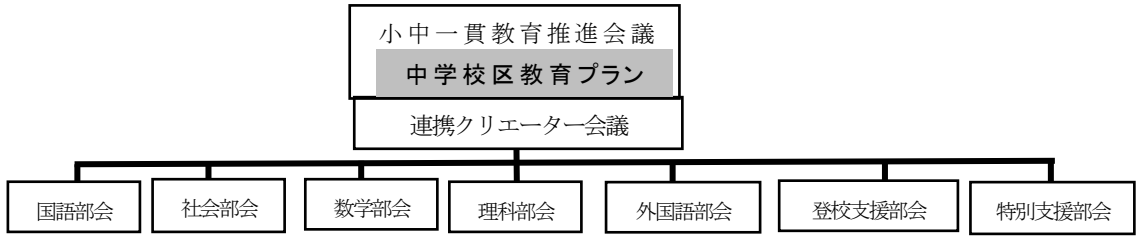
児童・生徒間の交流に関する構想

年齢や学年に関係なく交流の場がもて、一体感のある学校	中学校に対する期待をもてるつながりを築く	年齢や学年に関係なく交流の場をもて、一体感のある学校

回答内容を踏まえ、３校の教育活動の共通点や相違点、よさや課題などを明らかにし、新校における教育活動の軸をどこに置くべきかを構想しながら、「目指す１５歳の姿」を提起した。今後さらに、検討すべき課題として以下の内容が挙げられる。

・小中間に学習の基礎・基本に対する考え方に若干の差異がある。共通理解を図る必要がある。
・思いやりをどう定義づけるのかについても同様である。
・特別活動において、どのような力の育成を目指すのかを明らかにする必要がある。
・豊かなかかわりをもたらす、児童・生徒間交流の在り方を考えていく必要がある。

２　組織および実践計画



主な予定

６月２４日	第１回中学校区別協議会
９月　８日	旭丘中学校授業参観・学校説明会（小学校６年生）
１１月　６日	第２回中学校区別協議会
２月１８日	３校合同研究会

旭丘中学校・旭丘小学校・小竹小学校
グループの特色ある取組

３　いじめや不登校等の防止など豊かな心の育成に向けた取組の実践または研究・・・・・・・・・・・・・・【重点取組2】

＜概要＞
　不登校対策の共有・推進を図るため、７分科会のうちの一つを「登校支援分科会」として発足させた。各校の取組について、効果的、かつ効率的な情報交換の場にできるようアンケートを取り、具体的な状況把握に努めた。実態を知ることで対応方法や連携が必要と思われる事柄を知ることができた。

＜アンケート調査の結果から＞

①　登校支援を行っている児童・生徒の人数

・現状把握の必要性から来年度も人数調査を行い、３校の間で共有し推移を把握していきたい。

②　登校支援の方法

・**家庭への電話連絡、家庭訪問、保護者面談、本人面談、ＳＣとの面談、ＳＳＷｒとの面談、心のふれあい相談員への相談・対応、保護者との連絡帳のやり取り（登校時毎日）**などはグループ内の３校とも同じような対応を取っていたことが分かった。

・その他の方法として、**時間差による別室登校**（休み始めた直後、長期の欠席にならないよう、ほぼ毎日１単位時間程度、別室で話を聞く機会を設け、登校を続けるようにした。）、**生活アンケートの実施**（毎月生活アンケートを実施し、不安やいじめ、悩みごと等を訴えた生徒からのヒアリングを指示し、各学年やリクエストがあった教員にすぐに対応させ、問題の早期解決を図り、登校支援に繋げている。）という取組も挙がり、どちらも効果的事例となっている。

③　登校支援を行った結果の効果

・それぞれの学校で個々の対応を図り、保護者やその他の機関との連携を取りながら登校支援を行ったことで成果を上げた例が多々挙げられた。

④　登校支援において小中連携が必要と思われること

・３校とも**情報提供、校内支援の情報交換（生徒名、状況、支援方法等）**を挙げており、実際、姉妹関係で小中の連携での情報交換が有効的に作用し、効果の出ている事例も挙がっている。

⑤　今後の課題

・**別室登校時の場所、教室以外の居場所の確保、学習支援、別室対応の際の人員確保、業務の増加**などが共通の課題として挙がっている。

＜今後の方向性＞

・今年度は各校の取組をアンケート方式で情報交換をし、登校支援の在り方を学び合うことができた。効果的なものに関しては、それぞれの学校で児童・生徒の特性と照らし合わせながら指導の参考にしていきたい。

・登校支援の中で「未然防止策の検討を小中間の連携によって進めること」も含め、<u>小中での情報交換、情報提供の必要性が挙がった</u>。登校支援を行っている児童・生徒の人数は引き続き人数調査をし、推移をみていく。

・SSWｒなどの活用についても広く情報交換をし、今後の登校支援に結び付けていきたい。来年度以降も小中一貫教育校開校に向けた不登校対応における小中連携の推進に努めていきたい。

＜その他の取組＞

・小中特別支援学級で作品交流を行ったほか、特別支援部会では、基礎・基本の定着と小中のスムーズな接続を目指して、教材の交換と意見交換を行った。交流の成果として児童は中学校入学後の授業の様子がわかり、今後の見通しをもつことができた。また、生徒は自身の成長を実感することができた。